

---

# てんたん！

鄭文ういな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

てんたん！

### 【Nコード】

N9801X

### 【作者名】

鄭文ういな

### 【あらすじ】

【テンミリオン9周年記念作品】どうしようもなく虚しい冒険を終えて、早くも遅くも七年が経った。帰ってきた彼らに待っていたのは拍手でも報酬でも名誉でもなく、虚勢を張った現実だけだった。彼らは寄り添いあい突っ撥ねあい……そして十月二十八日は訪れた。魔王、あんたは一体どこにいるんだ。（u17名義で『テンミリオン』に重複投稿しています）

## 第〇幕

「ああああ！」

そんな叫び声が壁を跳ね回った。

女は、目の前の惨事を否定するように、現実にも目を背けるように首をふる。女の赤いツインテールが余裕なく揺れる。

「どうしたどうしたっ!？」

どたどたとした足音と、がさがさとした服の擦れる音が近づく。

自動で開く扉から、焦げ茶色のコートを身に着けた金髪の男が飛び出てきた。声の滲刺さとは相反して、眠たそうな顔をしている。

「マゼンダ……どうした」

わなわなと女の肩が震えている。金髪の男は、あまり気遣いのなさそうな声で、その肩に手を置いた。

「フロント……あ、あれ……」

肩が揺れているせいなのかどうかは分からないが、指も狂ったコンパスの針のように震えていた。その指が、焦点をぶらしながらもそれを差す。

そこには一枚の皿があった。銀色の机の上に、ぽつんとあった。

「あたしの……シュークリームが」

蒼白な顔を隠さずに、赤い髪の女マゼンダが言う。

「あたしの作ったおやつがない！」

金切り声をあげてマゼンダが叫ぶ。いちいち壁がそれを跳ね返した。マゼンダの瞳からは、うつすらと涙が溜まっていた。

「おやつがない……だ、と？」

フロントがはっとした表情で驚く。そして、その表情を笑みにかえ、フロントはいつもの台詞を壁に放つのであった。

「事件の香りがグッドテイストだぜ！」

こうして、十月二十八日は始まった。

## 第一幕

この町は、人口は多いが人通りの少ないところだ。六つの高層ビルが円く立ち並び、それらは地上十メートルのあたりから渡り廊下でつながれている。渡り廊下でつながれた六つのビルが、人工的な円を描いている。

「あの、ちよつとだけよろしいですか？」

ふわふわとした金髪が背中まで伸びていて、宝石を埋め込めたような瞳をした少女が、ちよつと渡り廊下ですれ違った男に、その声をかけた。

「……はい」

少女の美貌に酔いしれた、のかどうかは定かではないが、男は立ち止まった。少女よりもずっと背の高い男である。小動物のような少女は胸ポケットから、リスのような動作で白い紙を取り出す。

「わたくし、こういう者です」

少女が男に渡したのは名刺だった。この閉鎖的な時代にしては、なかなか珍しい代物である。顔に煌く宝石をちらつかせ、少女は軽くお辞儀をする。

「テンミリ探偵事務所、のテミさん？」

男が紙の文字を読み上げる。

「はい。それで、あの、少しお伺いしたいことがあるのですが……」  
「なんででしょう」

強い風が吹いた。渡り廊下の窓ガラスが、がたがたと揺れながらも風を受け止める。風が廊下内に入ってくることはない。テミの髪は靡いていた。

「A棟八〇二号室の、朝凧あさなぎさんをご存知ですか」

「ええ。あ」

ふと思い出したように、男は若干腕を持ち上げる。本当にそれはごくわずかなもので、テミはその腕の動きに気付かなかった。

「その人、先月から行方不明になっている人ですよね」

「はい」

どうやら、男は朝凧という人を知っているらしい。男はテミの可憐な顔を見ながら言う。

「僕は、その人の隣に住んでいる者です。八〇一号室の者です」

「あら、そうでしたか。今月の十四日、彼女に……」

テミは、男にあれこれと質問をした。答えを聞きながら、ペンをメモ帳に走らせる。焦げ茶色のカバーを着たメモ帳だ。テミの探偵服と同じ色だ。

「では、こんな朝早くに、お時間をおとりして申し訳ありません。ご協力に感謝します」

そうテミはやわらかくお辞儀をする。惜しげもなく晒される艶やかな金髪が、肩からふわりと垂れた。

頭を上げ、最後ににこやかな表情を見せ、テミは廊下を渡りきるためか男に背を向ける。そうしてゆっくりと歩こうとした。

が、「待て」という背中に刺さる声に、テミは足を捕らえられでもしたように止まる。

おそるおそるもう一度振り返ってみると、それはさきほどの男ではなかった。

「お、お兄様」

黒と白の混ざった色、つまり灰色の髪をしている。右はルビー、左はサファイア。そう喻えられそうな瞳が、同調して冷酷にテミを見る。

「また騙されたな。そんなので探偵が務まると思うのか」  
「……」

テミが頭をすくつと下ろし、目を伏せる。まるで親に叱られている子供だ。

「ここは無風の空間なのに、髪が靡いたりして、おかしいとは思わなかったのか？ ヒントのつもりだったのだが」

「………すみません」

消え入るような声だ。それでも芯の通った声だ。またミスをした、そう自分を恥じているというよりも、今のこの状況を鬱陶しく思っ  
てもいるような声だ。

「さあ、帰るぞ」

「はい」

自分たちの住むところへと、自分の仕事場へと、ふたりは向かう。  
ふいに、忘れ物でもしたように彼は立ち止まった。彼の赤と青の  
オッドアイは、宝石といえど光を失った、埃を被ったような感じを  
受ける。

「それと」

「……はい？」

「八〇一号室、今は空き部屋だ」

それだけ言って、彼はいつものように黒猫に変化して、先にテン  
ミニ探偵事務所へ行ってしまった。猫のように、無責任に妹を置い  
て。

廊下の窓を風が叩いた。風が漏れ込んでくることはない。テミの  
金髪は、銅像のように固まっていた。

## 第二幕

銅で出来た剣を握っていた。柄のほうではなく、鋭い刃のほうを。それは意外にも痛くはなかった。ただ紅い血が、蛇のように剣に巻きつくばかりである。

頭を弓で挟まれていた。端から見てそれは滑稽な様だったが、しだいに弦は首を絞めつけていった。深く、深く。

足元では毛虫が蠢いている。両足はすでに腫れ、潰れ、腐っていつていた。

毛虫はだんだん増えていく。山積み、毛虫が胴体へと顔へと近づいていく。毛虫の山。人を軸とした、毛虫の山。

毛虫が顔に到達するまえに、目の前に青年が現れた。青い髪だ。すらっとした顔立ちと、それに見合った鋭い目つき。青年はまさに今、毛虫の山に埋もれている人の頭に、弓矢を向けていた。

すぐに気付いた。その青年は 昔の自分だ。

青年が矢を放った。

「はっ！」

ブルースは飛び起きた。何か悪い夢でも見ていたようで、体中感じのよくない汗をかいている。けたたましく目覚まし時計が笑っていた。まるで壊れたテープレコーダーのように、けたけたと。

「ブルース？」

リンが、布団から顔を出して、上半身を起こしたブルースを見つめる。

笑いつかれたのか、時計は静かになった。朝の六時半だ。

「どうせ夢だ……」

そう小さく呟いて、ブルースはまたベッドに上半身を倒した。布団の中で、なにも身に着けていないリンを抱きしめる。

「うち、もう道場へ行かな」

そう冷たくも温かくもない口調で、リンは言った。パーマのかか

った黒髪が、白い布団から覗かせている。いとまたやすく、リンはブルースの腕をすり抜ける。

リンはC棟の一階にある道場で、総合格闘技を指南している。冒険から帰ってきてから、親の意志を受け継いだのだ。

ブルースはというと、作家をしている。冒険から帰ってきて、その経験をもとにした小説を、いくつも手がけているのだ。

リンが服を着ている間、ブルースは夢のことを考えていた。銅の剣と、首に食い込んでいく弓と、毛虫の山。それと過去の 冒険をしていたころの 自分。恐ろしい夢だ。自分が自分に向かって、まるで敵を射抜くように……。

「んじゃ、いつてくるね」

「ああ、いつてらっしゃい」

清楚なチャイナドレスを身にまとい、リンはふたりの家を出ていく。

ブルースはシャワールームへと向かった。

またけたけたと時計が嘲笑しだした。アラーム設定をまだオフにしていなかったのだ。

ブルースは無視して、ドアノブに手をかけた。



### 第三幕

魔王なんていなかった。魔王は、人々が創りだした幻だった。低  
迷していく社会の責任転嫁だった。ただの充て付けだった。

十人の子供たちが冒険で得た成果は、たったのこれだけだった。  
罪のない獣たちを見境なく殺していただけだった。実際には存在し  
ない魔王を討伐しようと、幻惑の罠に自分からかかっていっただけ  
だった。

誰から始まったわけでもなく、幻の悪者は生まれていた。口で言  
い伝わっていった童話のように、それは一斉に広まっていった。「  
悪いのは魔王だ」、「みんな魔王のせいだ」……自分たちの不平を、  
ありもしない幻想に押し付けた。

次第にみんな、魔王の存在を信じきってしまった。自己暗示  
のように、集団暗示のように。憎悪の矛先が魔王に向けられた。高  
校を卒業したばかりの十人が、魔王討伐軍として選ばれた。彼らは  
多くの人から栄光と激励の拍手をもらい、治安の悪い町から旅立っ  
ていった。

あまりに多くの獣を殺し、あまりに多くの命を奪った。彼らが最  
終的にたどり着いた城は、ただの寂れた廃墟だった。獣がねぐらに  
借りているだけの、無人の城だった。魔王はいなかった。だが彼ら  
は魔王の存在を信じ続けた。城にいる獣をまた殺し、城を炎で包ん  
だ。

魔王なんていなかった。流行はあくまで流行であるように、魔王  
の存在はだんだん人々の頭から消えていった。忘れ去られていった。  
そこに残ったのは、皮肉にも社会の発展だった。十人の子供は「あ  
りもしないものを追い続けた頭のおかしな子供たち」として、哀れ  
な眼差しを向けられた。それでも彼らは魔王の存在を信じ続けてい  
た。魔王がいらないということは、すなわち彼らは無駄に時間を浪費  
し、無駄に命を奪い、無駄に命の危険に首を突っ込んでいたという

ことになる。彼らは精神的な治療を受けさせられた。

それから七年が経った。十人の子供は、もう子供ではなくなっていた。

町にはAからFの番号のついた高層ビルが建てられた。住民の九割以上がそこに住み着いた。十人もそこに住んでいた。だが彼らは職にありつけなかった。履歴書の空白と、精神病を患っていたという事実は、剣よりも痛々しく彼らを切り刻んでいた。

ジルバは渡り廊下の窓を拭いていた。外側から、である。廊下の窓は完全に隙間のないように設計させているので、内側から外側を拭くということができないのだ。地上十メートルで、命綱を頼りに窓を拭く。

朝の七時だ。ジルバは六時からこの仕事をしている。彼の役割はA棟とB棟間の渡り廊下。ちなみに、清掃員は渡り廊下しか掃除しない。プライバシーを優先しているのだ。自分の部屋周辺は自分でも知らない幼児に未来を教えてあげるのが、ジルバの夢だった。だが百を越える命を奪った男には、低賃金の清掃員しか職は残されていないなかった。

ぼりぼりと、ジルバがぼさぼさした茶髪を？いていた。右手でモップを支えながらの行為である。それと、大きな欠伸もひとつ。

彼の髪が茶色いのは、生まれたときから、つまり、地毛である。今彼には、髪を染めるような金はない。

仕事を終えた彼は、のっそりとロープを伝い、屋上へと戻っている。実はこのとき、命綱とロープは、彼を支える二本の綱は、屋上のコンクリートに擦られて、今にもちぎれそうな状況だった。ジルバはロープを登る。強い風が吹いた。

そして安い綱はちぎれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9801x/>

---

てたん！

2011年10月28日03時10分発行